

『良かれと思って傷つけるということ』

明星学園 宮下 智

F男さん、重度精神発達遅滞にして、先天性白内障、したがって目が見えない。もちろん、言葉はない。

25年前、初めて出会った彼は、一日のほとんどを反芻で時間を費やし、声をかけられるのは、主に排泄と食事の時間、そんな時、彼は大きな声を出して騒ぐので、「静かになってからね」と言われて、いつも廊下で待機だった。

反芻は、口の中に戻したものを、細かく千切るようにして、指で弾いて外へ飛ばすので、彼の周り、半径2mは、反芻され、飛ばされた食材が散らばり、いつでも胃酸の酸っぱい臭いが漂っていた。

気晴らしのためにと出かける散歩では、辺り構わず野草を食べ荒らすので、絶対に食べさせないようにしようと思っている職員と綱引きのような状態での行き来だった。

考えてみれば、その頃、彼の思いが通じているものは、一つもなかった。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

一番最初の支援は、『食事に誘うその五分前に、F男さんのところへ行き、しばらく話したり、遊んだりした後食堂に誘導しよう』、なんていう初歩的なものだった。食堂へ行けば、大嫌いなスプーンを持たされる指導が待っている（当たり前なことだけど、目の見えない方の多くは、直接、食材を手で確かめながら食べないと何を食べようとしているかについての不安が解消されないから、本当は、ていねいなアプローチが必要なのだが）、それを前にして、一日なにも声をかけずにいた人を、いきなり食堂に引っ張り出せば、そりゃ大声の一つも出さずだろうと思ったからだ。だって、その大声は、立派な文句ですから。

次の支援は、確か『ビタミン剤の服用』だ。野草を食べることは、ひよっとしたらビタミンの不足を無意識に身体が補おうとしている姿ではないかと考えて、ドクターに相談したら、これがとっても良心的なドクターで、それは面白いと、ビタミンCを出してくれた。これも何やら思いつきの初歩的な支援だが、これを服用した途端に、なんと反芻が無くなってしまふから、考えてばかりいるのは駄目で、まずは実践してみるということが大切であることがわかる。野草を食べるのを少なくするのを目的で考え出した支援だったが、瓢箪から駒で、意外な好結果につながったのだった。

反芻が無くなったことは、彼にとっては大きな人生の助けだった。単なる医療的な問題を超えて、反芻する人には悲しいレッテルが必ず貼られているからだ。それは、「汚い・臭い」のレッテルだ。無意識の中で、人は、「汚い・臭い」人を遠ざける。本人の立場で考えれば、「みんなに嫌われている・疎まれている」ということになる。F男さんは、自分ではコントロールできない大声と合わせて、「みんなから嫌われている・邪魔にされている」と心を傷めていたに違いない。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

F男さんの気持ちが、少し遠くにしか感じられない人は、人前で、「汚い・臭い」と言われた時の悲しさを、身のやり場のない、どこかに消えてしまいたいような気持ちを思い起こしてみてください。その気持ちをF男さんに重ね合わせれば、スッとF男さんの気持ちに近づけるはずです。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

さらに彼には、もう一つ自分の力ではどうしようもできない行動があった。それは「噛みつき」だ。職員にも、他のメンバーさんに対しても、さらに母に対してもあった。この頃の彼は、いつ噛みつくか分からない状態にあつたので、母親までもがビクビクして付き合うような状態にあつた。このような状況は、決して誰も悪いわけではないのだが（噛みついてる彼も噛みつきたくて、噛みついてるわけではないし、周りの人間だってビクビクしたくってビクビクしているわけではない）、ただ、そのような態度で付き合われているF男さんにしてみれば、「やっぱり僕は嫌われている」という話になってしまう。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

『朝、起こさない』支援なんていうのも、初期の支援だ。夜尿の多かった彼は、それを防ぐという理由で、六時といえば、熟睡の途中に起こされて、排泄に誘われていた。朝、無理矢理に起されている彼は、おそらくそれが理由で、一日中イライラしていた。それに気付いた僕らは、彼が起きてくるまで、起こさないことを決めた。確かにウトウトしながら、布団の中にオシッコをしてしまう日もあったが、嘔みつく回数は圧倒的に減っていった。

皆さんもイヤでしょ？無理に起されること、誰でもやさしく起こされたいですよ…。



それから25年、いろいろな支援が提供された。そして彼の側にもさまざまな家庭環境の変化があった。いつしか彼には、あれほど聞いていた音楽が必要なくなっていた。草が好きな彼には、ふんだんに野菜を食べることができると、食後に用意された生野菜も次第に食べる必要が少なくなり、最後には無くなった。YESでもNOでも、どちらにも手を叩いてしまって、本当の気持ちを伝えることが苦手だった彼が、確実に手を叩くことで、YESを伝えることができるようになった。30年以上、ずっと丸坊主にポロシャツ、ジャージ姿の彼が、次第におしゃれをしないと、十分に見えない眼で、服を上手に選択して、買い物をするようになった。髪も伸ばし始めた。

そんな彼は、2年前、父親のお葬式では、大きな声を一回も上げず、その場の雰囲気を感じ取り、また自分の感情を上手に受け入れて、神妙に参列している姿があった。そして…、この6月。



食事が終わり、食堂を退席すると、必ず廊下で、全裸になる姿が見られるようになった。一日3回の食事、朝食であろうが、昼食であろうが、夕食であろうが、必ず退席の後に廊下で脱いだ。こんな時に必ず「暑いからだろう？」なんて言う人がいますが、それは、彼らの人間としての価値を軽く見ている、失礼な分析ということになります。

人間は、簡単には人前では裸にはなりません。それがまず、行動分析の前提になります。したがって、特にしゃべることによってコミュニケーションを取れない方々にとっては、「裸になる」ことは、究極の、必死のコミュニケーション姿であると考えられます。

食事の内容、スタイル…、今まで支援してきた方法を一つ一つチェックしていきます。しかし、彼は、必ず食後に服を脱ぎました。今までの支援方法には、特に落ち度がなさそうです。ここまで約一か月の月日が流れています。

そこまで来て、やっと私たちは彼の昔の姿を思い出しました。そしてその悲しさを、悔しさを思い起こすことができました。それは、「僕は邪魔者だ」という彼の人生のスタートでの悲しいトラウマです。特に食堂では、反芻と大声、度々の退席命令です。指導という名の。

もうそれからは25年の月日が流れています。しかし、「僕は、食堂では邪魔者だ」の想いは、消えることなく彼の心の奥にずっとしまい込まれていたのです。

もちろん、今の食堂では、彼を邪魔にしたり、無理に退席にさせたりということはありません。ただ、静かなところが好きなF男さんには、少し早めに食堂に入って頂き、皆がそろい食堂が賑やかになって来る頃には、「いただきました」をして、フロアに戻るといことをして頂いていました。

今まで言えなかったことを、彼は初めて「全裸になる」という方法で、初めて口にしました。「僕は、食堂にずっとはいけないんですか？みんなと一緒に食堂にいてはいけないんですか？職員の言うままに食堂を出て行かなくてはいけないんですか？僕は、みんなと仲間ではいけないんですか？」

F男さんは、その後、何回かの職員との相談を経て、「食事が終わったら、ゆっくりお茶を飲んでいたい。食堂をいつ出ていくかは、自分で決めるので、職員は送り出すことを止めて欲しい」と伝えることができました。

職員には、良かれと思って傷つけていることがある、25年経って、また、当事者に教えられるのです。

WELCOME TO SATORU WORLD

知的障害入所施設明星学園における心のケア

<http://homepage3.nifty.com/myojo-satoru/>